



平成31年4月1日
小平市立小平第四小学校長 石崎純一
小平第四小学校学校経営協議会

平成31年度 学校経営方針

1 はじめに

昭和29年に小平町立小平第一小学校分校として開校し、昭和31年に小平市立小平第四小学校に創立して以来62年、希望に溢れた多くの子どもとともに歩んできた。

本校は、玉川兄弟が築いた玉川上水沿いにあり、四季折々の動植物に触れることができる自然豊かな地域である。また、日本を代表する彫刻家の一人である平櫛田中の彫刻美術館が校区内にあり、文化遺産を身近に見ることができる。更に、外国語活動や国際理解教育の上でも結びつきの強い大学(津田塾大学等)も近隣にあり、子どもたちの学びに恵まれた環境と言える。

本校は、小平市教育振興基本計画を基盤に、この豊かな自然と歴史ある文化の風土の中で、学校が保護者や地域の信頼に応え、子どもたち一人一人の人権を尊重するとともに心身の健やかな成長を図るために地域の学校としての教育を推進する。

2 学校経営の基本理念

コミュニティスクールの特徴を生かし、

- 様々な立場の人との対話を介したコミュニケーションを通し、思いやりの心の涵養及び言語能力の育成を図る。
- 体験活動や奉仕活動を充実させ、生きる力の基盤を育てる。

児童一人一人が学校生活における学びからの習得や自己の成長を実感するとともに、仲間から認められたり必要とされたりし、学校で過ごす心地よさを味わうことができるようにする。

そして、「何ができるか」、「理解していること・できることをどう使うか」、「どのように社会・世界とかがわり、よりよい人生を送るか」の視点に立ち、児童の知・徳・体のバランスのとれた「生きる力」の育成を図るために、地域の教育力を生かした様々な授業や事業を展開する。

また、児童に「生きる力」をはぐくむためには、自然や社会の現実に触れる実際の体験が必要である。児童は、具体的な体験や事物との関わりをよりどころとして、感動したり、驚いたりしながら、「なぜ、どうして」と考えを深める中で、実際の生活や社会、自然の在り方を学んでいく。そして、そこで得た知識や考え方を基に、実生活の様々な課題に取り組むことを通じて、自らを高め、よりよい生活を創り出していくことができる。そのために、体験活動を充実させる。

3 教育目標

「他者と豊かにかかわり、知性を働かせ、明日を切り拓く子ども」の育成を目指す。

- 健康な子
- ◎考える子(重点)
- やさしい子
- おこなう子

- 他者と豊かにかかわり → 他者を思いやり(やさしい子)
- 知性を働かせ → 身に付けた知識・技能を活用し(考える子)
- 明日を切り拓く子ども → たくましく(健康な子) 行動する子ども(おこなう子)

【教育目標の達成に向けた学年目標】

	低 学 年	中 学 年	高 学 年
健康な子	元気よく挨拶・返事をし、身体をいっぱい動かす子	気持ちのよい挨拶・返事ができ、進んで身体を動かす子	他者と豊かにかかわり、心身ともに健康な子
考える子	自分の考えを相手に伝えられる子	経験を基に予想を立てて考えることができる子	見通しを持ち、学んだことや身に付けたことを生かせる子
やさしい子	わがまを我慢できる子	相手の気持ちを考えて行動できる子	相手を大切にできる子
おこなう子	いろいろなことに挑戦する子	自ら進んでいろいろなことに挑戦する子	自己の信念を貫き、最後までやり通す子

4 目指す学校像「みんなの笑顔が輝く学校」

【子どもにとって】学ぶ楽しさ、仲間と触れ合う喜び、自己の成長を実感できる学校

【教職員にとって】働く喜びを味わい、仕事に誇りをもてる学校

【保護者にとって】安心・安全で、信頼を寄せて子どもの健全育成に協力できる学校

【地域にとって】足繁く集い、子どもたちとかわりたくなる学校

5 目指す児童像

【健康な子】

心身ともに健康で、毎日の生活を充実させることができる児童の育成を目指す。低学年では基本的な生活リズムを確立させることについて家庭と連携した取組が必要となる。中学年では、外で遊んだり自らの運動課題に工夫して取り組んだりすることができるようにする。さらに、高学年においては自己の心身の健康や体力についての関心を高め、仲間と協働的に健康・体力の維持増進に努めることができる態度の育成を目指す。また、全学年を通して、自己肯定感を高めることができるように日常の指導を工夫していく。

【考える子】

主体的・対話的で深い学びができる児童の育成を目指す。まず、見通しを持って粘り強く取組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」ができるようにする。そして、他者との対話や先哲の考えを学んだりしながら自己の考えを広げるとともに、習得・活用・探究という学習プロセスの中で、問題発見・解決を念頭に置いた「深い学び」の過程が実現できるようにする。

【やさしい子】

自分の大切さとともに他の人の大切さを認める児童の育成を目指す。この考え方は、人権尊重の理念である。同学年の仲間だけでなく、様々な立場の人々と触れ合い相手の状況に応じた適切な接し方を学び、生活に生かせるようにする。また、相手の話に頷いたり、「どうしたの」、「ありがとう」など、相手を気遣う言葉を発したりする実践力を身に付けさせる。

【おこなう子】

目標をもち、主体的に行動する児童の育成を目指す。まずは、臆せず様々なことに挑戦する意識を持たせる。そのためには、挑戦したこと自体を褒め、さらに「こうするとよくなる」などの、一歩前進させる助言を加えていく。そして、「挑戦する」から「自らを高める」ステージへと移行させていくために、自己決定に基づく活動を振り返る機会を多く設け、よりよく生きる力を育てていく。

6 目指す教職員の姿

教職員一人一人が学校教育目標を念頭に入れ、教育目標の実現・達成に向けた指導をしていくことが大切である。

そこで、教職員自身が児童の模範となって日々の教育活動に従事できるように、教育目標と一致した目指す教職員像を設定した。

【健康な教職員】

「明るく、元気で前向きな教職員」を目指す。教職員間の風通しが良く、困り事、悩み事等を相談できる雰囲気作りに努めなければならない。特に若手教員の割合が高い本校においては、人材育成を図る上でもこのような環境づくりは重要である。

【考える教職員】

授業実践力、職務遂行力、児童理解力、豊かな人間力等を磨くために、「絶えず自己研鑽に励む教職員」を目指す。OJTの充実はもとより、Off-JTを活用するなどして教職員一人一人が自らを高める努力をする意識をもたなければならない。「与えられる研修」から「自ら求める研修」へ意識改革できるようにしていく。

【やさしい教職員】

「児童への愛情を十分に注ぎ、職務を全うできる教職員」を目指す。そのために、保護者や地域、そして児童から信頼される教職員でなければならない。教職員一人一人が教育公務員としての自覚を高め、サービスを厳守し自らを律することができる環境づくりに努めていく。

【おこなう教職員】

「同僚、保護者、地域と協働し、児童のために全力を発揮できる教職員」を目指す。そのためには、まずは、教職員一人一人が学校課題に対して当事者意識をもち、自分なりの解決策をもつことが大切である。一人一人のアイデアの結集がより良い解決策を生み、協働して解決することでチーム四小の凝集性が高まると考える。

7 学校経営の基本理念達成のための重要施策

(1) 人権尊重の精神を大切にされた教育の推進→「健康な子・やさしい子・おこなう子」

「児童一人一人の人権を尊重することとは、学ぶ楽しさ、仲間と触れ合う喜び、自己の成長を実感できるようにすること」を教職員及び本校の教育活動に関わるすべての人々共通の教育方針とする。そのために、人権教育を学校での全教育活動を通して行う。そして、児童に人権尊重・生命尊重について正しく認識させ、「一人一人の違いを認め、他者を尊重する心を育てる」ことを教育活動の根幹とする。

【達成のための具体策】

①「道徳科」の学校重点目標を「他者を思いやり、正しく判断し、たくましく生きぬく児童の育成」と設定する。また、話し合ったり書いたりする「言語活動」などを通じて、多様な感じ方や考え方に接する中で一人一人が考えを深め、判断し、表現する力を育むことができるような学習を展開する。また、教職員の授業実践力の向上を図るとともに、道徳授業地区公開講座等を活用し家庭や地域との連携を図る。

②教職員自らの人権感覚を磨くために人権教育プログラムを確実に活用し、他者への言葉の遣い方、掲示物やプリントの語句の使用の仕方、児童の作品に対するの評価の仕方等の教員研修を行い、人権に配慮した指導を徹底する。併せて、体罰は服務事故であるとともに大きな人権侵害であることを服務事故防止研修や日常のOJT研修を通して認識させる。

③学校生活のあらゆる場面において、学ぶ楽しさ、仲間と触れ合う喜び、自己の成長が実感できるように振り返りや教職員による肯定的な評価を積極的に行う。

④「他者とのかわわりを楽しむ児童」、「思いやりの心をもって相手と接する児童」の育成を目指し、「放課後子ども教室」や外部人材を活用した学習など、多くの人々との交流やボランティア活動の実践に取り組む。

(2)学力の向上→「考える子」

児童一人一人に達成感や充足感をもたせる授業を創造する自覚をもち、個を生かす授業はもとより、主体的・対話的で深い学びを通して、「生きて働く知識・技能の習得」、「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等」、「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性等」の3つの資質・能力の育成を目指すにあたり、授業改善の視点を次のように示す。

【達成のための具体策及び数値目標】

①これまでに積み重ねてきた研究の内容を継続する。

主体的・対話的で深い学びの実現に向けた指導法の工夫の研究で提案した3つの視点(①教材研究の共有化、②発問・指示の明確化、③手立ての焦点化)を全教科で実践する。

【数値目標】

学期末ごとの教員による自己評価(達成率9割以上・9割未満の場合は評価改善を実施)

②基礎学力の定着を図るために、「これだけは身に付けさせたい基礎基本」に基づいて反復練習を実践する。また、東京ベーシック・ドリルを活用した「四小検定」を実施し、基礎的な知識や技能の定着を図るとともに、身に付けた知識・技能を活用し、課題を解決できるようにする。学期末に児童の習得率を集計し、目標数値に達していない場合は具体的な改善策を提案させる。

【数値目標】

〔国語・算数・漢字テスト〕平均点が85点以上の児童の割合(学級児童の8割以上)

③読書に親しむ習慣を身に付けさせるために各学年ごとの読書量を設定して取り組む。学期末に進捗状況を調査し、評価改善を実施する。また、読書マラソンを実施するとともに、その成果を家庭に周知し家庭と連携した読書活動の推進を図る。

【数値目標】〔年間読書ページ数達成児童の割合〕

6年:7000p・5年:6000p・4年5000p・3年4000p・2年:40冊・1年:20冊

④指導法の工夫・改善を図り、地域の教育力を取り入れた地域参画型の授業を行う。具体的には、学校支援コーディネーターと連携し、ゲストティーチャーや学校支援ボランティア、PTAを意図的・積極的に活用し、体験的な学習を展開する。

【数値目標】

外部人材を活用した体験的な学習の実施(実施率各学期1回以上)

⑤週に1回の放課後補習教室、長期休業時の「四小寺子屋」など、教員や学生ボランティア等を活用した児童の補習機会を充実させる。また、家庭学習の時間を「学年×10分間」を目安とすることを「四小スタンダード」に示し、家庭に浸透させる。

【数値目標】

週1回の放課後補習教室の実施(年間30回)

(3)健全育成の推進→「健康な子・やさしい子」

児童一人一人を様々な視点から複数で把握し児童理解を図り、専科、養護教諭、生活指導部、スクールカウンセラー等、学校職員全体としてのチーム力で指導に当たる。

また、児童の発達段階に応じて「きまり」の必要性を理解させ、社会生活上のルールや基本的モラル・規範意識を育成する。更に、家庭と学校、地域が同じ視線に立ち、家庭教育の支援に取り組む。

【達成のための具体策及び数値目標】

①児童に「いじめは絶対に許されない」という意識をもたせ、それぞれの役割と責任を自覚させるために、年間3回(学期1回)、道徳の時間に「いじめ防止授業」を実践する。

【数値目標】

年間3回(4月・9月・1月)の道徳授業の時間に「いじめ防止授業」を実施(全学級10割)

②定期的な調査を通して、いじめの早期発見、迅速な対応に取り組む。また、日頃より、担当する児童についての情報が察知できる豊かな人間関係づくりを実践する。

【数値目標】

毎月のいじめ調査の実施といじめ問題を迅速に解決させる指導(いじめ見逃し0の継続)

③毎月末に週案簿に添付している「人権チェック表」「服務に関するチェックシート」で自己の指導姿勢を振り返り、人権における意識の高揚を図る。

【数値目標】

毎月末に2種類のチェックシートの実施と指導改善(体罰0)

④毎月末に生活指導の月目標の振り返りを行い、目標を意識して行動できる児童の育成を図る。

【数値目標】

毎月末に生活指導の月目標の振り返りの実施と具体的な取組の提示
(児童の自己評価9割以上・9割未満の場合次月に具体策をもって取り組む)

(4)体力の向上・健康の保持増進→「健康な子・おこなう子」

児童の体力等の現状を踏まえつつ、2020年のオリンピック・パラリンピック開催を機に、児童の運動・スポーツに対する関心や意欲、及び体力の向上を図る。また、健康づくりのために食育を重視した取組を行う。

【達成のための具体策及び数値目標】

①オリンピック・パラリンピック教育の年間指導計画に沿って「ボランティアマインド」の資質の育成に重点を置いた一学級一実践の取組を実施する。

【数値目標】

スポーツの意義や価値等に関する理解・関心が向上できた児童の割合(学級児童の8割以上)

②「体力の見える化」を行うために、体力テストの各運動種目の目標値を設定したり、体力テスト記録個票を活用したりした体力向上に向けた取組を行う。

【数値目標】〔走力・跳力・投力・持久力・泳力について〕

昨年度の記録と比較して自己記録を更新できた児童の割合(学級児童の8割以上)

③学校全体で、体力アップチャレンジのための「なわ跳び」や「持久走」などの業間運動、月曜朝遊びに取り組む。

【数値目標】

「できた・おおむねできた」と評価する児童の割合(学級児童の9割以上)

④給食指導をはじめ、ワークショップなど外部の食育関係機関と連携した指導の実践に取り組む。

【数値目標】

栄養士または外部の食育関係機関と連携した食指導を実施した割合(各学年1回以上)

(5)キャリア教育の推進→「おこなう子」

「自己肯定感」と「将来設計」を高めるための視点を持ち、「キャリア教育」を推進していく。

【達成のための具体策】

①小・中連携共通プログラム「キャリア教育の考え方」に基づき、各学年の実践的な活動を行う。

②本校の特色である地域と連携した、第2学年の「お仕事調べ」、第5学年の「お仕事体験」を充実させ、働くことの尊さ、そして地域を愛する気持ちの醸成も図る。第6学年の「お仕事インタビュー」では、起業家をゲストティーチャーとして招聘し、起業精神を学ぶ中で精神的にも経済的にも自立した個人として、問題意識を持ち、新しいことに挑戦することで既存の社会をよりよく変革していける人材の育成を目指す。

(6)特別支援教育の充実→「やさしい子」

特別支援学級と通常の学級との連携を密にし、特別支援教育の視点での教育環境を整備し、障がいの有無にかかわらず全教職員で児童の指導に当たる。

【達成のための具体策】

- ①特別支援コーディネーター及び特別支援教育専門員を中心に、校内委員会を充実させる。また、当該の児童の情報を共有し関係諸機関や家庭との連絡・連携を迅速に行う。
- ②特別な支援が必要な児童に対しては、学校生活支援シート・個別指導計画の作成や関係幼稚園・保育園、小平第四中学校、小平第十五小学校(通級指導学級)との連携を積極的に図り、幼稚園・保育園と小学校そして中学校と継続した支援・協力関係ができる体制づくりを行う。
- ③スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、巡回発達相談員、その他の外部関係機関と相互連携し、当該の児童の対応に当たる。
- ④副籍児童との交流を密にし、共生する意識を高めさせる。
- ⑤特別支援教室担当教員との報告・連絡・相談を密にし、特別支援教室運営の充実を図る。
- ⑥「学習の見通しを持たせる」、「黒板周りを簡素化する」など、特別支援教育の視点を取り入れた学習環境づくりをする。

8 教員の育成

校内研究をはじめとするOJTや外部の研修であるOff-JTのバランスを取り、教員の授業力をはじめとした専門性の向上を図る。

また、教員として身に付けるべき力を意図的・計画的に身に付けられるようにしなければならない。そのために、教員一人一人が、授業や分掌業務はもとより、学級・学年・学校の課題を見出し、解決策を考えることができるように、各経験や職層に応じたOJTを実施する。

(1)副校長の育成

- ①様々な課題の対応において校長の考えを聞き一緒に解決策を考えるなど、管理職間のパートナーシップを強化する。
- ②主幹教諭を含めた経営会議において、自校の経営課題を自ら見出させるとともに具体的な解決策を提言させていく。
- ③OJT責任者の統括として積極的に学級観察をさせ、教員の指導や学級掲示物の状況把握を通じた教員育成の意識を高めさせる。

(2)主幹教諭・指導教諭の育成

- ①経営会議に参加させ、直近の学校課題の発見や解決法の協議を行い、学校経営の意識を高めさせる。
- ②副校長の教員への服務事故未然防止に向けた取組や事務作業(主に調査関係)、地域との連携や窓口対応等をさせるなどし、副校長業務の魅力に触れさせる。
- ③学校経営の課題について意見を述べさせるとともに、その解決方法について主任教諭を活用したプロジェクトチームを発足させ、そのまとめ役とさせる。
- ④指導教諭については、若手教員への授業公開や授業参観及び指導を行わせる。

(3) 主任教諭の育成

- ①担当する分掌業務だけでなく、それ以外の分掌業務にも関わらせ、学校全体の動きや組織運営について学ぶことができるようにする。
- ②主任教諭同士で学校課題の解決策を協議させたり、若手教員の人材育成を行わせたりして、積極的な学校経営参画意識の向上をねらう。

(4) 教諭の育成

- ①「共通指導」を展開するために学年会での打合せを定期的に行い、チームワークを重視した組織的な指導を大切にする意識をもたせる。
- ②学級に問題が生じた場合は、速やかに管理職に報告し指導を受ける。また、一人で解決しようと無理をすることなく学年主任に相談し連携した取組を実施する姿勢を身に付けさせる。
- ③市教科等研究会や東京都教職員研修センター等の校外の研修に積極的に参加させ、自らの専門性の向上に努めさせる。
- ④「教材研究」を確実にし、全教科、課題解決型授業を児童に提供できるようにさせる。また、「いつでも・どこでも・だれからも」の精神で自らの指導力を高める意識を高めさせる。

9 おわりに

(1) 開かれた学校に

教育活動は公開が原則である。学校便り・学年便り・学級便りの定期的な発行やホームページを活用して、指導内容や担任の教育観、児童の学習の様子、学校生活の様子など幅広い情報発信を行わなければならない。また、学校説明会や保護者会等を通して、学校・学年・学級の経営方針、教育方針や計画等の十分な説明と協力を得る努力をしなければならない。学校としてできること、できないことについては、きちんと説明し理解を得ることが大切である。

外部評価や関係者評価（アンケート）、保護者会や個人面談等で、保護者・地域の思いや考えを聴き、学校改善に反映させる。

(2) 家庭や地域社会とともに歩む学校づくり

信頼される学校にするには、教職員一人一人が相手の立場に立った対応できることが重要である。外来者や電話への丁寧な対応、保護者の相談や地域の要望や苦情には誠実に応えなければならない。

その際、記録（氏名・内容等を正確に）を作成し、迅速に管理職（校長・副校長）に報告・相談しなければならない。児童に関わる問題、保護者や地域からの苦情等は、学校としての見解や方針について、職員間のずれが生じないように、共通した対応策を把握しておく必要がある。また、相手に不愉快な思いをさせないためには、服装、立ち振る舞い、言葉遣いなど、社会人としての常識を兼ね備えていなければならない。

(3) 教育公務員としての自覚と誇り

教師はだれもが児童にとって価値ある教師でありたいと願っている。児童の人格形成に直接関与する人間としての責任を自覚し、人間尊重の精神に基づいた学校づくりに努力する。公務員としての不正や服務違反が後を絶たず、社会から信頼を失うことが多い現状がある。「学校の常識は、世間の非常識」との批判も耳にする。サービスの厳正に努め、全体の奉仕者としての自覚をもって職務を遂行する。

- ①体罰、言葉の暴力、セクシュアルハラスメント、個人情報流失等、人権侵害に当たるような行為は絶対に行わない。
- ②勤務時間内の行動や自動車通勤等、保護者・地域住民から疑われるようなことはしない。

(4) 機能的な学校運営組織と共に高め合う人的環境

学校運営に関わる企画立案等の計画・決裁だけでなく、実施、評価の過程まで各分掌責任者（主幹教諭・指導教諭・主任教諭）が統括する機能的な組織を目指す。また、効率的な学校運営・運営管理を行うために、指導要録や通知表など様々な公簿も電子化し、個人情報保護を徹底し、情報管理機能の強化を図る。

職員室の整理整頓と機能的な物品整理を徹底する。きちんと整えられた執務環境では、個人情報漏洩等の事故も起こりにくい。また、教師が互いの実践をオープンにして学びあう姿勢が大切である。職員室で、先輩や同僚から学ぶことは数多くある。

(5) 事務の開かれた窓口対応と安全配慮、学校予算の適正な編成と執行

学校の印象は、受付で決まる。電話の応対、受付での外来者への対応など、細やかな気配りが求められるのは一般社会の常である。すべてを相手に合わせる必要はないが、内容や学校の状況をふまえて適切に応じなければならない。何より、不審者への備えを忘れてはならない。また、事務室内で扱う個人情報についても、厳重な管理が必要である。また、施設管理や保守管理業者等に対しても、窓口ないしは指示役として機能することも職務である。

学校を運営する予算は、言うまでもなく、市民の支払う税金によって賄われている。市教育委員会、事務室、職員室の連携を密にして、予算の効率的な編成と執行を進め、円滑な教育活動を推進する。

(6) まずは安全でおいしい給食、そして「食育」への連携

学校給食は、何より安全、安心が第一条件である。平成28年度に市内の小学校で発生した給食食材が原因の食中毒事件を教訓にして、同じ過ちをしないための食品の衛生管理やマニュアルに基づいた調理を徹底して再発防止に努めなければならない。その上で、子どもたちの嗜好をふまえた味付けの栄養バランスのよい魅力的な献立を提供する。時には担任に協力し、給食指導の一翼を担うこともある。各学級の食の傾向をつかんだり、片付け方など、生活指導上の情報提供もできる。

担任が行う給食指導や総合的な学習を中心に生活指導や保健指導と連動した「食育」の指導に関与し、専門性を生かした支援を行うのも、栄養士を中心とした給食室の新たな役割である。実践に当たっては、組織的計画的に取り組む。